

# 日本最古のニワトリの雛<sup>ひな</sup>を確認

調査：唐古・鍵遺跡<sup>からこ かぎ いせき</sup> 第58次調査

大きさ：右（寛骨）-残存長 3.5cm  
左（大腿骨）-残存長 4.5cm

出土年：1995年 同定調査：2020年

時代：弥生時代中期

ニワトリは、私たちにとって最も身近な家畜です。その祖先は東南アジアに生息するセキショクヤケイですが、日本にいつ、どのような形でニワトリがもたらされたかはよくわかっていません。1981年、唐古・鍵遺跡の発掘調査で弥生時代後期（A. D. 3世紀）のニワトリの頭<sup>かたど</sup>を象った土製品（第2室に展示）が出土しました。これは、それまで知られていた古墳時代のニワトリ形埴輪<sup>はにわ</sup>より古い<sup>じんい</sup>人為物で最古のものになりました。その前後、各地で弥生時代のニワトリの骨が出土し、7遺跡14例が知られるようになりましたが、ほとんど雄のニワトリの骨でした。

今回、紹介するニワトリの骨は1995年に出土したものでしたが、2020年に北海道大学の江田真毅教授による「コラーゲンタンパクの質量分析」という新たな研究方法でニワトリであると同定されました。さらにはこのニワトリの骨が雛であったことから、唐古・鍵遺跡で継代飼育されていたと推定されました。その骨の年代は、放射性炭素年代測定法によりB. C. 3～B. C. 4世紀に特定され、日本最古のニワトリの雛であることが明らかになりました。

中国では文献上、B. C. 641年までにニワトリがいたと考えられています。しかし、東アジアでは確実な基準によって年代がおさえられたものはなく、今回の資料はこの地域にニワトリが導入された下限を示す貴重な資料になりました。この成果は『Frontiers in Earth Science』という国際的な科学雑誌に4月20日掲載されました。

